

## 弾性圧迫ストッキングによる血栓後症候群の予防効果は期待できず

血栓後症候群は深部静脈血栓症によくみられる合併症である。先行研究により血栓後症候群の予防に弾性圧迫ストッキングが有効であることが示唆されているが、いずれの研究もプラセボの対照が設定されていない単施設での小規模研究であった。そこで本研究では、プラセボ（偽）ストッキングと比較して弾性圧迫ストッキングによる血栓後症候群の予防効果について、多施設ランダム化プラセボ対照試験を実施し検討した。

対象は、カナダとアメリカ合衆国の初回発症の深部静脈血栓症患者で、弾性圧迫ストッキング群と偽ストッキング群に割り付け、6か月目とそれ以降の **Ginsberg** 基準（1か月以上の脚の痛みと腫脹）による血栓後症候群の発症を比較した。2004年から2010年の間に、弾性圧迫ストッキング群に410例、偽ストッキング群に396例を割り付けた。その結果、血栓後症候群の累積発症率は弾性圧迫ストッキング群が14.2%、偽ストッキング群が12.7%となり、有意差はなかった。ストッキングの使用頻度が高かった患者に限定した解析でも、結果は類似していた。

したがって、弾性圧迫ストッキングには深部静脈血栓症の予防効果はなく、深部静脈血栓症後に弾性圧迫ストッキングを日常的に使用することは奨められない。

出典：The Lancet. 2014; 383: 880-888